釧路市立北中学校「学校だより」

北　魂

令和８年（2026年）１月５日発行　VOL 40

TALISの結果に抗う

釧路市立北中学校長　冨　田　直　樹

明けましておめでとうございます。保護者、地域の皆さん、今年もよろしくお願いします。令和８年（2026年）が始まりました。本校においては本日が「仕事始め」であり、早速多くの教職員が出勤し、朝から３学期の授業等の準備に当たっています。７日（水）には今年度３回目のコミュニティ・スクール協議会が行われます。また、８日（木）から職員会議が予定されていて、年度末反省の内容を協議します。３学期始業式にはまだ時間がありますが、それまでにも多くの会議や研修等が入っていて、今年も慌ただしいスタートになりそうです。そんな中でも、目指す生徒の姿（重点教育目標）の実現に向けて教職員一同、各種教育活動に邁進していこうと考えています。今年も保護者、地域の皆さんのお力添えをよろしくお願いします。

さて、昨年の10月初めに、経済開発協力機構（OECD）の国際教員指導環境調査（TALIS）の結果が発表されました。本調査は、校長や教員が学校の教育環境などをどう見ているのかという国際調査です。今回は2024年に調査した内容でした。日本はTALISに中学校が13年、18年、そして24年の３回、小学校が18年と24年の２回参加しています。今回の調査結果を見て、「またか」と肩を落とした学校関係者も多かったと思います。それは、日本の教員の仕事時間が「参加国最長」という結果が繰り返されたからです。13年の結果は「日本の先生は世界一忙しい」と紹介され、教員の長時間労働を何とかしないと、という世論をつくりました。2019年に中央教育審議会が学校における働き方改革の答申を公表し、業務改善が急速に進んだという実感はありますが、それでも「参加国最長」という結果は変わりませんでした。

TALISは仕事時間だけを探るものではありません。校長や教員が学習環境の変化をどう捉えているかを多角的に調べています。その中から気になる結果を２つ紹介します。１つ目は、「教員不足の大変さが明らかになった」ことです。文部科学省は21年に「教師不足に関する実態調査」で都道府県、政令指定都市など全68団体を調査し、その結果、始業日時点で2,558人が不足していると発表しました。今回のTALISにおいて、「同僚の欠勤による追加業務」について、ストレスを「かなり」「非常によく」感じている教員は小学校で43.1%、中学校で40.1%となり、どちらも前回の倍以上になっています。同僚が産休を取ったり心の病で休んだとしても、代わりの教員が見付からないという現実が見えてきます。教員不足はメンタルの病休の引き金になっていると言えると思います。

２つ目は、「同僚性の低下」です。「教員は、互いに信頼し合うことができる」に「当てはまる」「非常によく当てはまる」と答えた教員の割合は、小学校85.0%で前回より3.9ポイント、中学校76.9%で前回より6.1ポイント下がりました。この数字は、参加国中、最も低下しています。

21年の中央教育審議会答申において、学校が学習指導のみならず、生徒指導の面でも主要な役割を担い、児童生徒の状況を総合的に把握して教師が指導を行うことで、子どもたちの知・徳・体を一体的に育むと世界から賞賛されました。今回のTALISは、人と人が手を携え、悩みを共有しながら子どもを育てようとする「学校」自体の崩壊を示しているとも捉えることがでます。「決してそんなことはない」と前を向きながら、生徒、教職員ともに残り３ヶ月の学校づくりに邁進していきたいと考えています。